

## テキスト・データベースによる詩的語彙の頻度とその分析：ヘルダーリンの「火」に関する語，FeuerとFlarnmeを中心に

棚瀬，明彦  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5390>

---

出版情報：言語文化論究. 14, pp.51-60, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## テキスト・データベースによる詩的語彙の頻度とその分析

— ヘルダーリンの「火」に関する語, Feuer と Flamme を中心に —

棚瀬 明彦

### 0.

ヘルダーリンのいわゆる後期作品における特徴のひとつとして、「火」に関する語の多用および統語的構造の破壊が言われるが、これらは観察に際する印象にもとづく見解であり、必ずしも統計的に実証されているわけではない。本論においては、特に前者、すなわち「火」に関する語の多用について、データベースを利用して実際の数値をもとに検証しようとするものである。印象にもとづく見解と実際の数値との間にどの程度の相関関係があるのかを実証し、また、もしその程度に何か目立った差異もしくは特徴があるとすれば、その原因はどこにあるのか等について考察検討するのが目的である。

### 1.

Renate Böschstein-Schäfer は、そのヘルダーリン論：“Die Sprache des Zeichens in Hölderlins hymnischen Fragmenten”<sup>1)</sup>の中で次のように述べている。

An der Sprache der hymnischen Fragmente, die Hölderlin etwa in den Jahren 1803 bis 1806 verfaßt hat, tritt neben der Auflösung der logisch begründeten Syntax besonders eine Qualität hervor: eine dem Dichter bis dahin völlig fremde Sinnlichkeit, vor allem eine Vorliebe für das Heiße, Feurige, Brennende — korallene Beeren, reifgekochte Früchte, glühendes Meer. Die Gewalt dieses Feurig-Konkreten unterscheidet die späte hymnische Dichtung sehr scharf von der Produktion des ‘klassischen’, des ‘reifen’ Hölderlin.

(ヘルダーリンが、およそ1803年から1806年までに執筆した讃歌断片の言葉には、論理に基づくシンタクスの解体と並んで、特にあるひとつの特質が顕著に現れている。すなわち、これまでこの詩人には全くなじみのない感覚、とりわけ熱いもの、火のようなもの、燃えているものの愛好、たとえば、珊瑚のような漿果、熟して煮えた果実、灼熱の海などである。このような火の具象が、後期讃歌を、古典的で成熟したヘルダーリンの制作物からきわめて明確に区別している。)

ここで言われているのは、「火」と言うよりはむしろそれを想起させるような意味を持つ語の方に重点が置かれているように思われるが、「火」という語そのものも含まれていると考えられる。そこで今回は、特に「火 (Feuer)」と「炎 (Flamme)」という語、およびその派生語もしくはそれとの合成語等についてその使用傾向を調べ、それについて考察してみたい。

上記の引用の中で、特に注意をしなければならないのは、「讃歌断片 (hymnische

Fragmente)」と「後期讃歌(späte hymnische Dichtung)」という言葉である。Beißner は、「讃歌断片」ではなく「讃歌草案(hymnische Entwürfe)」という分類をしている。しかし、上に例示された詩の語彙は、Beißner の「祖国の歌(die vaterländische Gesänge)」の中に含まれている詩の語彙でもある。また、「後期讃歌」という言葉も大変曖昧であり、Beißner にはそのような分類はない。しかし、従来からこの言い方は、曖昧さを残したまま、ヘルダーリン論において一般的に用いられてきた。ここでも、おそらく1800年以後のいわゆる讃歌形式の詩を広く指していると考えられる。ここでは、これらのことを踏まえておく必要がある。

## 2. 検索方法とその範囲

この調査の底本としては、Beißner による Stuttgart 版大全集 Hölderlin. Sämtliche Werke<sup>2)</sup> (以下 StA と略記) を用いる。特に全 8 巻15冊のうち、詩、Hyperion, Empedokles, 論文、書簡、翻訳が含まれている第 1 巻から第 6 巻までを用いる。

また、検索のためには、詩および Hyperion については StA に基づいて作成された既刊の下記のインデックスを使用する。

1) “Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin. I. Teil: Die Gedichte.”<sup>3)</sup>

2) “Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin. II. Teil: Hyperion.”<sup>4)</sup>

それ以外の部分、すなわち、論文、書簡、翻訳については、現在のところ公開されている信頼の置けるデータベースはないので、筆者がこれまで独自に作成してきた「簡易テキスト・データベース」<sup>5)</sup> を利用し、これに今回、新たに作成した Empedokles のデータベースを利用する。

## 3. 検索結果

以上のようなデータから、Feuer およびその合成語ならびに派生語、Flamme およびその合成語ならびに派生語を検索した結果をジャンル別にまとめると、以下の表1-1および表1-2のようになる。なお、いずれも StA における Lesarten の部については省略した。また、パーセントについては、小数点以下第 3 位を四捨五入した。

これを見ると、全体的には、詩と Hyperion とにおいて、これらの語の使用回数およびページあたりの使用頻度(%)が、他の作品やジャンルと比較してとりわけ高いように見て取れる。Empedokles では、予想に反して使用頻度は低く、論文や書簡では極端に少ない。また、翻訳では比較的使用回数は多いがページあたりの使用頻度はさほど高くない。しかし実際にはもう少し細かく見ていく必要がある。例えば Hyperion は、印刷出版されるに至る前の段階として、いくつかの稿や断片があり、上の表の中ではそれらの区別がなされていない。また、Empedokles については、Erste Fassung, Zweite Fassung, Dritte Fassung, Frankfurter Plan, Grund zum Empedokles, Plan der dritten Fassung, Entwurf zur Fortsetzung der dritten Fassung のすべてを含んだ数値である。

Hyperion については、Hyperion oder der Eremit in Griechenland (Hyp. と略記), Fragment von Hyperion(Frag.), Die Metrische Fassung(Metr.), Hyperions Jugend(Jug.),

表1-1

	詩	Hyp.	Emp.	論文	書簡	翻訳	計
ページ数	660	288	166	123	469	330	2,036
Feuer	40	39	5	3	8	23	118
Feuerarme			1				1
Feuerauswurf			1				1
Feuerflamme		2	1			1	4
Feuergeist	1						1
Feuerherd		3					3
Feuerkelch			1				1
Feuerprobe		2					2
Feuerregen		1					1
Feuerrohr		1					1
Feuersgewalt	1						1
Feuerstahl	1						1
Feuerstelle						1	1
Freudenfeuer	1						1
feurig	15	9		2	3		29
feurigfroh	1						1
feurigmächtig		1					1
計	60	58	9	5	11	25	168
頻度 (%)	9.09	20.14	5.42	4.07	2.35	7.58	8.24

表1-2

	詩	Hyp.	Emp.	論文	書簡	翻訳	計
ページ数	660	288	166	123	469	330	2,036
Flamme	39	31	11		7	15	103
Flammenatmen	1						1
Flammengewölk	1						1
Flammenguß	1						1
Flammenhauch						1	1
Flammenopfer	1						1
Flammenschwert [d]	1				1		2
Flammenwagen	1						1
Geistesflamme		1					1
Grabesflamme	1		3				4
Himmelsflamme	1						1
Höllensflamme	1						1
Lebensflamme		1					1
Opferflamme	1						1
Wetterflamme	1						1
flammen	9	1					10
anflammen	7	1					8
aufflammen	3						3
emporflammen							0
entflammen	5						5
計	74	35	14	0	8	16	147
頻度 (%)	11.21	12.15	8.43	0	1.71	4.85	7.22

Die vorletzte Fassung (vorl. F.), Vorstufe der Endgültigen Fassung (Vorst.), Bruchstücke einer späteren Fassung (Bruch.) を含んでいる。特にここでは、使用頻度の高い Hyperion について、それらを区別した場合の数値をまとめ、次の表2-1と2-2に示している。

表2-1

	Hyperion							計
	Hyp.	Frag.	Metr.	Jug.	vorl.F.	Vorst.	Bruch.	
ページ数	160	22	13	36	18	37	2	288
Feuer	30			5	1	3		39
Feuermarme								0
Feuerauswurf								0
Feuerflamme	1					1		2
Feuergeist								0
Feuerherd	2					1		3
Feuerkelch								0
Feuerprobe		1		1				2
Feuerregen	1							1
Feuerrohr						1		1
Feuersgewalt								0
Feuerstahl								0
Feuerstelle								0
Freudenfeuer								0
feurig	6		1	1		1		9
feurigfroh								0
feurigmächtig	1							1
計	41	1	1	7	1	7	0	58
頻度 (%)	25.63	4.55	7.69	19.44	5.56	18.92	0	20.14

表2-2

	Hyperion							計
	Hyp.	Frag.	Metr.	Jug.	vorl.F.	Vorst.	Bruch.	
ページ数	160	22	13	36	18	37	2	288
Flamme	21		1	2	2	5		31
Flammenatmen								0
Flammengewölk								0
Flammenguß								0
Flammenhauch								0
Flammenopfer								0
Flammenschwert[d]								0
Flammenwagen								0
Geistesflamme	1							1
Grabesflamme								0
Himmelsflamme								0
Höllensflamme								0
Lebensflamme	1							1
Opferflamme								0
Wetterflamme								0
flammen		1						1
anflammen								0
aufflammen	1							1
emporflammen								0
entflammen								0
計	24	1	1	2	2	5	0	35
頻度 (%)	15.00	4.55	7.69	5.56	11.11	13.51	0	12.15

詩については、上の表1-1および表1-2において特に使用回数の高い語、すなわち Feuer と feurig および Flamme と flammen に絞って見てみたい。StA にならって、1800年までと1800年以降とに分けてこれらの語を調べてみると次の表3-1のようになる。参考として表の右端に印刷出版本 Hyperion の場合を挙げている。

表 3

	StAI-1 (bis 1800)	StAII-1 (nach 1800)	計	Hyperion
ページ数	314	265*	579	160
Feuer	8	25	33	30
feurig	12	2	14	6
小計	20	27	47	36
頻度 (%)	6.37	10.55	8.12	22.50
Flamme	19	15	34	21
flammen	5	3	8	0
小計	24	18	42	21
頻度 (%)	7.64	6.79	7.25	13.13
総計	44	45	89	57
総頻度 (%)	14.01	16.98	15.37	35.63

\* Friedensfeier (StAIII)を含む

詩においても、先の Hyperion や Empedokles の場合と同じように、StA においては、いくつかの詩の場合、最終稿に至る前の複数の稿もそれぞれひとつの詩のように扱われている。それらについては各稿を比較して、ほぼ同じ文言の中でこれらの語が用いられている場合は、それらを合わせてひとつと数え、そうでない場合は別々に数えることにした。単純に、最終稿をもってひとつの詩と数えるということができないからである。また、精神病時期の「最後期の詩 (späteste Gedichte)」および「断片 (Pläne und Bruchstücke)」はもちろん省くが、「オーデ (Ode)」および「エレギー (Elegie)」についてはここに含めている。なぜなら、まずは、1800年より前の詩とそれ以後の詩とにおいて比較してみたいからである。上の表3-1は、そのようにして出された数値である。ちなみに、StAII の中から「オーデ」と「エレギー」とを省くと数値はそれぞれ、ページ数：-102, Feuer：-8, feurig：-1 / Flamme：-7, flammen：-1となり、数値は次のようになる。

ページ数：163	Feuer：17	feurig：1	小計 18	頻度% 11.04
	Flamme：8	flammen：2	小計 10	頻度% 6.13

#### 4-1. 分析と考察

上の表3を見ると、1800年を境として Feuer と feurig については、確かに使用回数の差が見られる。Feuer は、1800年より前では比較的少なく、それ以後では目立って多くなっている。しかし feurig ではその関係は逆転している。また、Flamme と flammen についてはほとんど差はなく、むしろ1800年以後の方が減少している。また、Hyperion と Empedokles

は、1800年より前の段階に成立した作品であるので、ヘルダーリンの詩作を全体的に考察する場合には、そのことも考慮に入れておく必要がある。

1800年を境として、それ以後では、確かに詩においては Feuer と feurig についてやや特徴が見られるはするものの、Flamme と flammen を合わせた頻度から見れば約14パーセントと約17パーセントで、1800年以後において僅かに増えてはいるものの、大きく増えているわけではないことがわかる。したがって、これらの語に関する限り、1803年以後に特に増加したとは言えないであろう。Hyperion と Empedokles が、1800年より前の作品に属することを考えれば、むしろ、1800年までの方がこれらの語の使用頻度は高いことになる。したがって、ヘルダーリンにとっては、その試作の全期間を通して Feuer や Flamme に関する事象に高い関心があったと考えられる。ただ、上の表に示された語以外で、火に関する語、すなわち冒頭に引用した中で Böschenstein-Schäfer が挙げているような語については、なお詳細な調査、検証が必要であることは確かであろう。

では、上に挙げた例えば Feuer という語の意味内容およびその語の使い方について何か特徴的な変化はないであろうか。次に、それについて少しばかり考察してみたい。

#### 4-2. Feuer の意味

「火」という現象が、歴史的・文化的にきわめて重要な意味を持っていることは言うまでもないが、ヘルダーリンについてこの意味を考察する場合、古代ギリシアがひとつの大きな基準として存在していると言えよう。「火」は、古代ギリシアにおいてどのような意味を持っていたのか。“Der neue Pauly”<sup>6)</sup>においては、次の5つの分野に分けてそれを説明している。

- A：実生活上の火、すなわち、料理、鍛造、陶器、火葬、暖房、照明、信号、武器等々に使用した。
- B：ギリシア神話において、竈の女神ヘスティア、手職人の神ヘパイストス、天上の火を人間にもたらしたプロメトイスおよびその反動としてのパンドーラ等々に関連するもの。
- C：ギリシア宗教において、神への捧げ物 (Opfer)、終末論的次元、Feuertaufe すなわち本来死すべきものを火によって不死なるものに浄化する等々に関連するもの。
- D：ギリシア哲学においては、ヘラクレイトスにおけるコスモスの根源、エンペドクレスにおける四大元素、アリストテレス、ピタゴラス、ストア主義等に関連するもの。
- E：最後にローマ宗教に関するもの。

以上の5つであるが、ヘルダーリンの Feuer は、これらのいずれの意味をも大なり小なり含んでいると考えられる。もちろんそればかりでなく、当然ながら、ヘブライズムの、キリスト教的な神と結びつく意味が影を落としており、それらについては稿をあらためて論ずるほかはない。そこで、ここではそのような意味があることを踏まえながら、これとは別に大きく次の3つに分けてみたい。すなわち(A)直接的・物理的に燃える火を指示する場合 (B)間接的・比喩的な用法の場合 (C)その他の場合、である。例えば、Und fressende Feuer – / Palläste und Thürme / Mit ehernen Thoren, / Gigantischen Mauern / Zernichtend im Augenblick. / (そして食い尽くす火—王宮と塔を、青銅の門と巨大な壁

もつものを、一瞬に滅ぼしながら。) (StAI-1, S. 72) のような場合は (A) に、また Und wie im Aug' ein Feuer dem Manne glänzt, (男子たる者の眼に火が輝くように) は (B) とする。そのいずれの場合にも当てはめることが困難な場合は (C) とする。しかし実際には、厳密にこれらの3つに截然と分類できるわけではなく、(A) は、広義には (B) をも含んでいる場合が多い。しかしあえて分類してみると、

1800年まで: (A)4/(B)4/(C)0 (ページあたりの頻度は(A) (B)とも1.27%)

1800年以降: (A)6/(B)12/(C)0 (ページあたりの頻度は(A)は2.93%, (B)は5.85%)  
したがって(A) (B)ともに1800年以降は増加しているが、特に(B)が増えている。

ここでもう一つヘルダーリンにおける Feuer に関する語法の特徴を挙げれば、通常は「水」と結びつく語と結びついていることである。(下線は筆者による)

- 1) StAI-1, S. 206: vom Olymp reegnete Feuer herab. (オリンポスから火が雨と降り注いでいた。)
- 2) StAI-1, S. 208: Feuer trinke ich und Geist aus deinem freudigen Kelche, (火と霊を私はあなたの喜びの杯から飲む)
- 3) StAII-1, S. 80: vom Olymp reegnete Feuer herab, / Reißendes! (オリンポスから火が雨と降り注いでいた、引き裂くものが!)
- 4) StAII-1, S. 119: Und daher trinken himmlisches Feuer jetzt / Die Erdensöhne ohne Gefahr. (それゆえ地上の子らは今危険なしに天上の火を飲むことができる。)
- 5) StAII-1, S. 197: Reif sind, in Feuer getaucht, gekochet / Die Frucht (火に浸され、煮られて、果実は熟している)

3), 4), 5) が1800年以後の詩である。1) と3) は同じ表題の詩 'Der Wanderer' (さすらい人) で、1) は4連からなるエレギーであり第1稿、3) は6連からなるエレギーで第2稿という関係にある。「降り注ぐ」と「飲む」という動詞との結びつきでは、1800年を境としてその前後に見られる。1800年以後では「浸される」という語との結びつきが新たにひとつ加わるにすぎない。したがって、この限りにおいては1800年前後で顕著な差異を認めることはできないと言ってもよい。

差異を強いて求めるとすれば、2) では「杯から飲む」となっているのに対し、4) では「天の火を飲む」という表現になっている。飲むという行為に直接結びつくような「杯」といった中間的な働きをする物を表わす語がなく、「火」と「飲む」が直接結びついている。5) の例でも「火」と「浸される」が直結されている。また、次の例の場合、水とは関係はないが、火に対する呼びかけは、直接的である。

StAII-1, S. 190: Jezt komme, Feuer! / Begierig sind wir / Zu schauen den Tag, (今こそ来たれ、火よ! われらは日を見ることに焦がれている、)

このような文体の簡潔性、直接性は、ヘルダーリンの思考過程と深い関わりを持っており、それはまた、統語的文章構造の破壊にもつながっていると考えられる。それが少なからず意図的であることについて、ヘルダーリンは、1802年に C. U. Böhlendorf 宛の手紙の中で次のように述べている。

Mein Lieber! Ich denke, daß wir die Dichter bis auf unsere Zeit nicht commentieren werden, sondern daß die Singart überhaupt wird einen andern Charakter nehmen, und

daß wir darum nicht aufkommen, weil wir, seit den Griechen, wieder anfangen, vaterländisch und natürlich, eigentlich originell zu singen.<sup>7)</sup>

(親愛なる君、僕の考えでは、僕らは今の時代に至るまでの詩人に注釈をつけることはないだろう。そもそも歌いかたが別の性格をとるだろう。僕らはギリシア人以来ふたたび祖国的で自然に、そもそも独自の歌い始めるのだから、広く受け入れられることはないのだ。)

## 5. 結 語

冒頭に引用した Böschstein-Schäfer の言を契機として、1800年を境として、ヘルダーリンの詩について「火」と「炎」の語、すなわち Feuer, feurig, Flamme, flammen という語の使用頻度に何か違いがあるのか、あるとすればそれはどのような理由によるのか、といったことについて考察するのが目的であった。ところが実際に調べてみると、Flamme と flammen とについてはほとんど差があるとは言い難い数値であり、Feuer については確かに目立って増えている(約3倍)。しかし、feurig では逆に著しく減少している(約6分の1)ことがわかった。しかも、1800年より前に書かれた Hyperion においては、Feuer も Flamme も、1800年以後の詩におけるより使用数も頻度も高い。これらのことを考えると、ヘルダーリンは、1800年より前においても、またそれ以後においても常に貫して持続的にこれらの語に関心を抱いていたと言うことができる。これらの語に限って言えば、1800年以後になって、あるいは1803年以後になって特にこれらの語を愛好したとは必ずしも言えない。ただ最後にも見たように、これらの語と他の語との接続の仕方の変化、直接性、意外性などによって、読む者に強い衝撃や刺激を与え、その結果、強い印象を刻み込んでいると言うことができる。また、1800年以後は、実際に燃える火ではないものを Feuer に喩える形で用いることによってもその意外性から、読む者に強い印象を与えているとも考えられる。

27. 04. 2001

## 注

- 1) In: Hjb.1975-1977, Tübingen 1977, S. 267-284.
- 2) Hölderlin. Sämtliche Werke, Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. v. Friedrich Beißner, Stuttgart 1946-1985. (略記 StA)
- 3) Bearbeitet von Heinz-Martin Dannhauer u. a.: Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin. I. Teil: Die Gedichte. Tübingen, 1983.
- 4) Bearbeitet von Hans Otto Horch u. a.: Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin. II. Teil: Hyperion. Tübingen, 1992.
- 5) 「簡易テキスト・データベース」については、『独仏文学研究』第48号(1998)、第49号(1999)、第50号(2000)に所収の拙論参照。なお、本データベースについては、StuttgartにあるHölderlin-Archivより、Web上に公開するつもりはないかとの問い合わせを受けたが、本来そのような目的で作成したわけではないので、その意志は現在のところない旨の回答をしている。しかし、著作権等の問題が解決できれば公開するこ

とも咨かではない。

- 6) Hrsg. v. Hubert Cancik und Helmuth Schneider: Der neue Pauly. Enzyklopädie der Antike. Band 4, Stuttgart, 1998.
- 7) StAVI-1, S.433.

## **Eine Untersuchung zur Häufigkeit des Vorkommens von Wörtern wie “Feuer” und “Flamme” sowie deren Ableitungen und eine Analyse ihrer Verwendung in Hölderlins Dichtung anhand einer Text-Datenbasis**

In der Hölderlinforschung gilt Hölderlins Vorliebe für das Heiße und Feurige als eine sprachliche Eigentümlichkeit seiner sogenannten späten hymnischen Gedichte. Im vorliegenden Aufsatz wird zuerst die Häufigkeit des Vorkommens von dichterischen Wörtern wie “Feuer” und “Flamme” sowie deren Ableitungen untersucht und anschließend deren Verwendung in den Gedichten vor und nach 1800 verglichen und analysiert. Auffällige Eigentümlichkeiten lassen sich bei der Analyse des Wortes “Flamme” zwar nicht erkennen, aber zum Wort “Feuer” konnten einige charakteristisch-stilistische Besonderheiten herausgearbeitet werden.